

②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
在外日本古美術品保存修復協力事業（セ08）	文化遺産国際協力センター	47
文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信（セ01）	文化遺産国際協力センター	48
東アジア諸国文化遺産保存修復協力（セ02）	文化遺産国際協力センター	49
東南アジア諸国文化遺産保存修復協力（セ03）	文化遺産国際協力センター	50
西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（セ04）	文化遺産国際協力センター	51
文化財保存修復手法の国際的研究（セ05）	文化遺産国際協力センター	53
諸外国の文化財保護に係る人材育成（セ06）	文化遺産国際協力センター	54

在外日本古美術品保存修復協力事業 (②セ08-11-1/5)

目 的

日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、これらの保存修復の専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、海外で所蔵されている掛軸などの紙本絹本文化財および漆工芸品のうち、本格的な修復が必要な作品を一旦日本に運び修復して返還することを目的としている。また、ワークショップを開催し、保存修復に必要な日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行う。

成 果

平成23年度は、2館5点の作品（絵画5点）を修復した。うち3点が修復完了・返還済み、2点が修復中である。また、ケルン市博物館連合・ケルン東洋美術館（ケルン・ドイツ）にて漆の保存修復ワークショップ、ベルリン国立博物館連合・アジア美術館（ベルリン・ドイツ）にて絹本紙本文化財の保存修復ワークショップを開催した。

[作品修復]：・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵 出山釈迦図 仲安真康筆 紙本墨画 掛軸装1幅 修復完了・返還済み。・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵 山水図 祥啓筆 紙本墨画淡彩 掛軸装1幅 修復完了・返還済み。・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵 寒山拾得図 伊藤若冲筆 紙本墨画 掛軸装1幅 修復完了・返還済み。・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵 靈照女図 絹本著色 掛軸装1幅 修復中。・キンベル美術館（USA）所蔵 十五菩薩来迎図 絹本著色 掛軸装2幅 修復中。

[ワークショップ]：1) Workshops on the Conservation and Restoration of Urushi (Lacquer ware)、場所：ケルン市博物館連合・ケルン東洋美術館（ケルン・ドイツ）、内容：・(Workshop 1) 2011年11月14日、参加者4名、講義“Introduction to Urushi”“Restoration of Urushi Objects”、実習“Materials and techniques –Japanese lacquer”・(Workshop 2) 2011年11月15～18日、参加者6名、講義“Damage of Urushi objects”, “History and damage of Export Lacquer”, “Concept and process to Urushi conservation”, “Cleaning”, “Case study on the International Training program”, “The Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Objects Overseas” and “The Mazarin Chest Project”、実習“Investigation into Urushi objects”, “Facing”, “Materials and techniques”, “Making sample board-grounds and coating”, “Cleaning”、2) Workshops on Conservation of Japanese Art Objects on Paper and Silk、場所：ベルリン国立博物館連合・アジア美術館（ベルリン・ドイツ）、内容：・(Workshop 1) “Basics for Japanese paper and silk cultural properties”、2011年11月15～16日、参加者16名、講義“Paper”, “Adhesives”, “Introduction to soko (Japanese Traditional Mounting)”, and “The Making of washi”、実習“Preparation of Paper for Drawing and Writing with Chinese Ink”, and “Art with Chinese Ink”・(Workshop 2) “First step for Japanese folding-screen restoration”、2011年11月17～18日、参加者11名、講義“The Structure of Folding-Screens” and “An Example of Folding Screen Restoration”、実習“Creation of Panels for Screens”・(Workshop 3) “Second step for Japanese folding-screen restoration”、2011年11月21～23日、参加者10名

研究組織

○川野邊渉、加藤雅人、楠京子、山田祐子、川端冴子（以上、文化遺産国際協力センター）、早川典子、山下好彦（以上、保存修復科学センター）、田中淳、綿田稔、塩谷純、江村知子、城野誠治（以上、企画情報部）、安孫子卓史、深井啓（以上、研究支援推進部）

文化財保護に関する国際情報の収集・研究・発信 (②セ01-11-1/5)

目 的

文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国における文化財保存・修復事業を推進する。

成 果

1. 国際会議等出席：2011年6月19日から29日まで、パリのユネスコ本部で開催された世界遺産委員会に出席した。また、国内で開催された文化財修復関連の国際シンポジウム等に参加した。
2. データベースの作成：収集した各国文化財保護関連情報についてデータ入力を進め、ウェブサイト上で公開した。また、今年度に国際資料室に受け入れてデータベース化した595点(和漢書287点、洋書308点)の資料、および国際資料室で所蔵する雑誌475種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。
3. 対訳法令集シリーズの刊行：世界各国の文化財保護に関連した基本的法令の条文を和訳して対訳法令集シリーズとして刊行しており、今年度は3ヶ国を対象とした。まずイタリアの文化財景観法典につき改訂版を入手したので、ウェブサイトにて公開済の和訳を検討・修整の上、出版した。次に、2010年に改正されたエジプト考古遺産保護法を原文より和訳し、同施行規則とともに出版した。さらに、ベトナムの文化遺産法について、原文より和訳し、改正内容を反映した形で同施行令とともに出版した。
4. シンポジウムの開催：2011年12月9日(金)に東京国立博物館平成館において、国際シンポジウム「大仏破壊から10年：世界遺産バーミヤーン遺跡の現状と未来」を奈良文化財研究所との共催にて開催した。このため、Omar Said Sultan (アフガニスタン情報文化省副大臣)、Habiba Sarabi (バーミヤーン州知事)、Michael Petzet (ドイツ・イコモス)、Michael Jansen (ドイツ・アーヘン大学教授)、Georgios Toubekis (ドイツ・アーヘン大学教授)の各氏を招聘した。
13:00-13:20 開会挨拶／13:20-13:40 「アフガニスタンにおける文化遺産保存の現状」(Sultan)／13:40-14:00 「バーミヤーンにおけるユネスコ遺跡保護事業の10年を振り返って」(Lin)／14:00-14:20 「「バーミヤーン遺跡保存事業」とバーミヤーン」(Sarabi)／14:20-14:40 「バーミヤーン大仏-破片の保存と公開に向けて」(Petzet)／14:40-15:00 「マスタープラン：バーミヤーンにおける文化的景観と考古遺跡」(Jansen)／15:00-15:20 「バーミヤーン遺跡の保護にむけた日本の取り組み」(山内)／15:35-17:00 パネルディスカッション(司会：西村幸夫)／17:00-17:10 閉会挨拶
5. 報告書作成：2011年3月3日から5日まで開催した「西アジア文化遺産国際会議」について、アラビア語の和訳および編集作業を行い、日英2ヶ国語版の報告書として出版した。

刊行物：・『各国の文化財保護法令シリーズ[12]イタリア』 東京文化財研究所 12.3・『各国の文化財保護法令シリーズ[13]エジプト』 東京文化財研究所 12.3・『各国の文化財保護法令シリーズ[14]ベトナム』 東京文化財研究所 12.3・『国際資料室蔵書目録』 東京文化財研究所 12.3・『アジア文化遺産国際会議報告書「西アジアの文化遺産—その保護の現状と課題—」』 東京文化財研究所 12.3

研究組織

○川野邊渉、山内和也、友田正彦、加藤雅人、有村誠、影山悦子、安倍雅史、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木環、佐藤桂、境野飛鳥、今井健一朗、渡部妥子、高多加奈子(以上、文化遺産国際協力センター)、神葉子(企画情報部)

東アジア諸国文化遺産保存修復協力 (②セ02-11-1/5)

目 的

本研究は、国際共同研究を通じて東アジア諸国の保存・修復の考え方や技術に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を形成することを目的として、敦煌莫高窟壁画及び陝西省墳墓壁画をはじめとする中国の文化遺産の保存修復のための共同研究を実施し、人材養成に協力するものである。また、モンゴルの文化財保存修復事業に協力している。

成 果

〈敦煌莫高窟壁画〉

敦煌壁画の保護に関する日中共同研究は、本年度から第6期共同研究（5カ年）を始めることになった。第6期は、第5期に引き続き第285窟を対象として壁画の製作材料と製作技法に関する研究を実施し、これを完成することを目的としている。

- (1) 第5期共同研究評価会議：9月4日。本年度から第6期共同研究を始めるに先立ち、敦煌研究院において第5期共同研究に対する評価会議を開催し、莫高窟第285窟壁画の調査研究について報告を行い、中国側外部評価委員5名から、高い評価を受け、さらに引き続き共同研究を継続することが推奨された。これをもとに、第6期共同研究実施のための合意書を作成し、敦煌研究院を通じて甘肅省文物局、中国国家文物局へ許可申請を提出した。
- (2) 現地調査：2月12日～21日。第285窟の調査で残された天井部の調査に着手した。携帯型蛍光X線、顕微鏡等を用いた分析調査を実施した。
- (3) 敦煌研究院研究員の来日研修：2月27日～3月21日の日程で丁淑君、孫勝利研究員（情報管理）、于宗仁研究員（分析）を招聘し、各担当の内容に関する研修を実施した。この来日研修は、セ06の枠組みで実施した。
- (4) データベースの完成：サーバーの整備とデータ入力を進め、第285窟データベースの基本システムを完成した。
- (5) 報告書の作成：東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の2011年度成果報告書を編集し、発行した（92頁を参照）。

〈陝西墳墓壁画〉

陝西省西安市では周辺地区の開発に伴い、近年大量の古代墳墓が発見されている。その中に毎年必ず数カ所の壁画墓が含まれるが、剥ぎ取り、埋め戻しを原則とし、作業時間も短いため、必ずしも十分に壁画情報を収集できていない。発掘機会を利用し、環境調査と保存処理、及び記録保存に関する方法検討のための研究を日中共同で行い、中国の壁画保存に貢献しようとするのが、本研究の目的である。

- (1) 現地視察：9月。陝西省文化財保護の共同研究を行うため、彬県大仏寺、陝西歴史博物館壁画陳列館等を視察して意見交換を行った。
- (2) 共同研究合意書作成：墳墓壁画に関して、陝西省考古研究院との共同研究を実施するため、合意書を作成した。
- (3) 試験的環境計測の実施：墳墓壁画についての記録保存と環境の測定・管理を実現するために、陝西省考古研究院と共同で乾陵章懷太子墓の内部に環境調査のデータロガーを設置し、試験的研究を開始した。

〈モンゴル〉

モンゴルへの文化財保存修復協力については別途受託事業の枠組みで実施した。

研究組織

○岡田健（保存修復科学センター）、川野邊渉、友田正彦、秋枝ユミイザベル、佐藤桂、渡辺真樹子、高林弘実、津村宏臣（以上、文化遺産国際協力センター）、早川泰弘、犬塚将英、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、神葉子、皿井舞（以上、企画情報部）、高妻洋成、田村朋子、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）

東南アジア諸国文化遺産保存修復協力 (②セ03-11-1/5)

目 的

東南アジア諸国においては、文化遺産の保存修復に関する国際協力や域内連携の動きが近年活発化しているが、なお多くの文化遺産を抱え、国ごとの保護体制に関するレベルの差も大きい。このため、当該地域における保存修復事業への協力およびこれに関する調査研究の実施を通じて文化財の保存・修復に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。

成 果

カンボジア、タイを対象とする共同研究およびインドネシアでの協力事業を実施するため、各国の関係各機関との調整を行うとともに、カンボジアにおいて実質的な調査研究活動に着手した。

1. カンボジア：(1)現地調査1：6月6日～12日、アンコール遺跡群タネイ遺跡において、石造遺跡の微生物被害に関する調査を実施した。具体的には、環境条件と着生する地衣類・蘚苔類・藻類などの種類との関係を明らかにし、これらの生物が石材劣化に及ぼす影響についての研究調査を継続的に行っている。また、6月8日～9日にシエムレアプで開催されたアンコール遺跡保存開発国際調整委員会（ICC）技術会議に参加し、上記調査に関する報告を行った。(2)現地調査2：12月2日～11日、タネイ遺跡において、日本・韓国・イタリアから微生物分類額や生物劣化の専門家も招いて上記に続く現地調査を実施し、乾季における状況の観察や微生物種同定のためのサンプル採取等を行った。同12日にはICC年次総会に出席したほか、17日までプレア・ヴィヒア遺跡を含む国内遺跡の現状調査、西トップ遺跡における今後の協力に向けた奈文研担当者との現地協議等を行った。(3)合意書更新：12月13日、アプサラ機構本部にて、同機構ブン・ナリット総裁、東文研亀井所長、奈文研井上副所長出席のもと、三者による2015年度までの共同研究に関する合意書に調印した。
2. タイ：(1)合意書更新：2011年11月、タイ文化省芸術局との間で、2016年3月までの共同研究協力に関する覚書を更新した。(2)専門家招聘：2012年1月30日から2月4日まで、Chaiyanand Busayarat（アユタヤ歴史公園部長）、Saneh Mahaphol（タイ国立博物館保存担当）の両氏を招聘し、国内の煉瓦造遺跡保存修復や文化財防災対策等に関する見学および意見交換を行った。
3. インドネシア：(1)パダン調査および協議：11月15日～21日、パダン被災文化遺産復興支援に関し、ジャカルタにおけるインドネシア歴史考古局との打合せ、およびスマトラ島パダン市等での現地調査を実施した。(2)専門家招聘：上記タイ人専門家招聘にあわせ、Soni Prasetya Wibawa氏（セラン文化遺産保護事務所）を招聘し、同様の見学および意見交換を行った。

以上の今年度活動内容については成果報告書にまとめ、刊行した。このほか、前年度に文化庁委託事業としてインドネシア、西スマトラ州パダン市において実施したワークショップの成果をインドネシア側に還元するため、インドネシア語の報告書を刊行した。

刊行物

- ・『東南アジア諸国文化遺産保存修復協力 平成23年度成果報告書』 東京文化財研究所 12.3
- ・『Laporan Workshop Mengenai Rekonstruksi Warisan Budaya Bersejarah Kota Padang』（パダン町並み保存ワークショップ報告書・インドネシア語）東京文化財研究所 11.12

研究組織

○川野邊渉、友田正彦、秋枝ユミイザベル、佐藤桂、岡村知明、銚井修一、柏谷博之（以上、文化遺産国際協力センター）、朽津信明、森井順之（以上、保存修復科学センター）、神葉子（企画情報部）

西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 (②セ04-11-1/5)

2. イラク

イラク国立博物館より保存修復家1名をアルメニアに招聘し、金属製品の保存修復に関する人材育成を実施する予定であったが、諸般の事情により招聘ができなかったため、次年度に延期して実施する予定である。

3. 西アジア周辺諸国における文化遺産の調査研究・保護への協力等

3-1. トルコ：

カッパドキア石窟壁画の保存修復（ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金）の実施にむけた計画の策定を行った。

3-2. インド：

インド考古局保存修復専門家1名を日本に招聘し、「アジャンター遺跡の保存修復にむけた専門家会議2011」を7月27日に開催した。アジャンター壁画の保存修復に関する成果の共有、および現場での補足調査、人材育成を2月19日～3月3日にかけて継続して実施した。また、『アジャンター壁画の保存修復に関する調査研究事業－第2窟、9窟壁画のデジタルドキュメンテーション』を刊行した。

3-3. タジキスタン：

国立古代博物館所蔵の壁画片の保存修復を10月9日～11月8日にかけて行い、文化財専門家の人材育成・技術移転に関する協力を継続して実施した。また、報告書『タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所アーカイヴ カフカハ遺跡群の図面と出土品（土器と木彫）』、および『タジキスタン国立古代博物館所蔵壁画断片の保存修復 2010年度（第8次～第10次ミッション）』を刊行した。

②国際協力・交流等 Area11

3-4. 中央アジア：

中央アジア各国における考古遺跡の保存とドキュメンテーションに関する協力を実施した。

キルギス共和国では、6月27日に国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と合意書および覚書を締結し、10月6日～17日および2月4日～10日にかけて文化遺産のドキュメンテーションに関するワークショップを実施した。3月14日～19日にかけてキルギス人専門家3名を招聘し、研究会を開催した。(以上、文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」と連携。)

カザフスタンでは、9月27日～10月19日にかけて遺跡の地下探査に関するワークショップを実施し、キルギス共和国にて、10月18日～26日にかけて遺跡の測量に関するワークショップを実施した。(以上、ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金「シルクロード世界遺産登録にむけた支援事業」と連携。)

3-5. コーカサス：

アルメニア歴史博物館との合意書を6月24日に締結し、考古金属資料の保存修復に関する協力事業を開始した。考古青銅遺物の保存修復に関して、国内ワークショップを1月24日～2月3日に、国際ワークショップを2月7日～11日に実施した。(文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「コーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業」と連携。)

3-6. エジプト：

JICA事業「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト」のフェーズⅠ及びフェーズⅡにかかる国内支援業務を継続して実施した。

4. 国際会議への参加

「“Second Meeting of the Coordinating Committee on the Serial World Heritage Nomination of the Silk Roads” International Conference」(5月3-6日、アシュハバード、出席者：山内和也)

「“Expert Members Meeting of the Coordination Committee, Silk Roads World Heritage Serial and Transnational Nomination”」(3月22-23日、タシュケント、出席者：山内和也)

研究組織

○川野邊渉、山内和也、有村誠、影山悦子、島津美子、邊牟木尚美、鈴木環、安倍雅史、川口雄嗣、田島さか恵、本郷浩志、中村寛、近藤洋(以上、文化遺産国際協力センター)、前田耕作、谷口陽子、津村宏臣、藤澤明、伏屋智美、末森薫、松田泰典、山藤正敏、渡抜由季(以上、客員研究員)、杉山洋、森本晋、石村智、脇谷草一郎、田村朋美、田代亜紀子(以上、奈良文化財研究所)

文化財保存修復手法の国際的研究 (②セ05-11-1/5)

目 的

文化財の保存修復に関する国際協力を進めるためには、それぞれの文化財を形作る素材、それを現地で保存修復しているこれまでの手法に関して十分に理解しておく必要がある。

本研究では、保存修復手法に関わる様々なテーマを設定し、その問題に関する国内外の専門家を招聘して国際文化財保存修復研究会を実施することにより、これらの情報を関係者で共有し、国際協力に資することを目的とする。

成 果

・講演会および検討会

テーマ：海外における日本の装潢修理技術利用に関する研究会

場 所：東京文化財研究所地下会議室

日 時：2012年2月16日（木）

10：00-12：00 研究所内視察

13：30-13：45 開会の挨拶、趣旨説明

13：45-14：30 吉田博志（株式会社 吉田商店）

14：30-13：15 Regina Belard（フリーア&サックラー・ギャラリー）

15：30-16：30 Luis Crespo（スペイン国立図書館）

16：30-17：15 意見交換会

17：15 閉会の挨拶

参加者：31名

・調査および視察

場 所：東京文化財研究所、小林刷毛製造所

期 日：2012年2月14日（火）、15日（水）、17日（金）

刊行物

・『The Workshop: “The Use of Techniques of Japanese Paper Conservation Outside Japan”』 東京文化財研究所 48p 12.3

研究組織

○川野邊渉、加藤雅人、楠京子、山田祐子、川端冴子（以上、文化遺産国際協力センター）

諸外国の文化財保護に係る人材育成 (②セ06-11-1/5)

目 的

発展途上国においては、文化財の保護を担う人材が依然不足しており、その育成が緊急の課題になっている。文化財保護の担当者や学芸員並びに保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に推進することにより、諸外国における文化財保護のための人材育成に協力する。

成 果

敦煌研究院研究員の招聘研修

2012(平成24)年2月27日～3月20日の日程で中国・敦煌研究院保護研究所の研究員3名を日本へ招聘し、研修を行った。今回の研修では、東京文化財研究所と同院との第5期共同研究において開発してきた文化財データベースを敦煌側に間もなく引き渡すにあたり、その機能について実習と講義を通じて理解を深めることを目標とした。資料室所属の丁淑君、孫勝利研究員(情報管理)の2名は、データベースの管理運営に関する研修と作業を行った。分析室所属の于宗仁研究員(分析)については、各種観測機器操作技術向上のための研修を行った。研修は主として東京文化財研究所、一部を同志社大学にて実施した。

研究組織

○川野邊渉、山内和也、友田正彦、加藤雅人、津村宏臣、高林弘実、渡辺真樹子(以上、文化遺産国際協力センター)、岡田健(保存修復科学センター)